

令和2年6・7月号(275号)
(皇紀2680年) 毎月1日発行

編集人 瀬戸 開

新風

発行人 魚谷 哲央
年間購読料 2,000円

維新政党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
https://shimpu.jpn.org/
otayori@shimpu.jpn.org

横田滋さんの闘ひを引き継ぎ、 日本国家の再興を

元衆議院議員 維新政党・新風顧問 西村 眞悟



十三歳の中学一年生の時に、夕方、学校から家の近くまで帰ったところで、突如北朝鮮の工作員に拉致され新潟の海岸から真つ暗な船倉に入れられて北朝鮮に運ばれ、そのまま現在に至るまで、四十三年間も抑留されてゐる横田めぐみさん。

彼女の父、横田滋さんが、令和二年六月五日に亡くなった。八十七歳のご生涯だった。この訃報に接し、我々は、そのご生涯「祖国日本再興」の為に捧げられたと思はねばならない。もちろん、横田滋さんは、妻の早紀江さんとともに、北朝鮮に拉致された娘のめぐみさん救出の為に、全身全霊を以て頑張り抜かれた。同時に、めぐみさんのご両親として、横田滋さんと早紀江さんは、日本にとって大切な使命を背負はれてゐる。それ

は、言葉の真の意味の「救国」、即ち、日本国民の魂を揺り動かして「国家再興」を促すことだ。よつて、横田

滋さんの死は、我が国と国民に衝撃を与える、まさに痛恨の訃報である。北朝鮮は、十三歳の我が国の中学一年生を拉致して解放せず、父は娘と再会できず亡くなった。我が国とは、我が国の政府とは、何か？！無念ではないか。

横田さんご夫婦は、ともに洗礼を受けられたキリスト教徒なので、次のやうに表現するに相応しい。娘のめぐみさん救出を目指す横田滋さんと早紀江さんのご夫婦は、我が祖国日本が、自国民を守り自国民を救出できる国家に再興されなければならないことを、全日本国民に実感させるために、過酷な運命を背負ふ者として神から選ばれたのだ。そして、滋さんは、その使命を果たし天に召された。私は、今まで、静かな声で切々と語りながら、これほど、国民に深い感動を与へ、同時に国家に衝撃を与える夫婦に接したことはない。この意味で、横田滋さんと早紀江さんと、拉致されためぐみさん、その弟の拓也さんと哲也さんの五人は、我が国を本来の姿に戻すために選ばれ、過酷な運命を背負ふ「尊い聖家族」である。

拉致問題は、平成八年の暮れに、民主党の同志で現在特定失踪者問題調査会の会長をしてゐる荒木和博さんから、横田めぐみといふ十三歳の少女が北朝鮮に拉致されてゐると教へられ、二人で、この事実を天下に明らかにしなければならぬ、と申し合はせた。次に、父親の横田滋さんが、めぐみさんの拉致を西村が実名で国会において明らかにすることを承諾したことを荒木さんが確認した上で、私は、年が明けた平成九年一月、内閣に質問主意書を提出し、翌二月に衆議院予算委員会に質問した。内閣総理大臣と政府は、北朝鮮が横田めぐみさんを拉致したと確認した。以後、北朝鮮に拉致された被害者の家族により拉致被害者家族会が結成され横田滋さんが会長になった。そして、横田ご夫婦は、娘の救出を訴へて全国各地を廻り始めた。

しかし、この時、我が国の左翼系は「拉致はでつち上げ」とごまかす北朝鮮政府に同調して横田ご夫婦を始め拉致被害者救出を訴へる者に冷淡だった。保守系にも、社会党委員長とともに北朝鮮の金日成に会いに行つた金丸訪朝団で明らかになつた、北朝鮮シンパが多かつた。大阪の堺に来られた横田ご夫妻とともに、繁華街で拉致被害者救出のピラを配つてゐるとき、私の眼

の前で、通行人がご夫妻の差し出すピラを地面に払ひ落とした。さらに、平成十四年の小泉純一郎総理の北朝鮮訪問も、北朝鮮の金正日との「平壤共同宣言」で明らかになつた。巷間言われた拉致被害者救出が目的ではなく、我が国が北朝鮮への巨額の請求権を放棄した上で北朝鮮に巨額のカネ(一兆円以上)を渡して日朝国交を樹立する「輝かしい外交の成果」が目的だった。だから訪朝団は北朝鮮から拉致被害者の象徴的存在である横田めぐみさんを含む八名の死亡を伝達された時、それを点検もせず盲信し、東京で北朝鮮に言はれた通り拉致被害者家族を家族ごと個室に招き入れて、官房長官と外務副大臣に「死亡宣言」をさせたのだ。拉致被害者家族が葬式をすれば拉致問題は終了し、あとは、国税から巨額のカネを北朝鮮に渡し、小泉純一郎と外務省の輝かしい功績としての日朝国交が樹立されるからだ。

横田御夫妻の覚悟
しかし、言つておく。この小泉の対北朝鮮外交の「成功」は、我が国が、核を持つテロ国家を巨額のカネで育てる最悪かつ世紀のテロ支援国家に転落することであつた。そして、この転落から我が国を救ふのは、娘の「死亡宣言」を受けた横田滋・早紀江のご両親だった。平成十四年九月十

四日夕刻、突然の死亡宣告直後に記者会見に臨んだ家族会会長の横田滋さんは、涙を流し、マイクの前で声が詰まり出なくなつた。その時、早紀江さんが嗚咽をこらへて次のやうに話した。
《絶対に、この何もない、いつ死んだかどうかつていふことさへ、分からないやうな、そんなことを信じることは出来ません。そして、私たちが一生懸命に、支援の会の方々と力を合はせて闘つてきた、このことが、かうして大きな政治の中の大変な問題であることを暴露しました。このことは、本当に日本にとつて大事なことでした。北朝鮮にとつても大事なことです。そのやうなことののために、本当にめぐみは犠牲になりました。た使命を果たしたのではないかと私は信じてゐます。いづれ人は、皆、死んで行きます。本当に濃厚な足跡を残して行つたのではないかと、私はさう思ふことで、これからも頑張つて参りますので…。

本当にめぐみさんのことを愛して下さつて、めぐみちゃんのことをいつも呼び続けて下さつた皆様に、また折つておてくださつた皆様に、心から感謝をいたします。まだ生きてゐることを信じ続けて闘つて参ります。有難うございませう。》

この発言は、あたかも靖國の母の如く、拉致された娘が、公の崇高な使命を果たしたと訴へるものであり、聞く人々に深い感動を与へた。同時に、拉致被害者を救ふ国民運動が、崇高な救国の運動であること、を明確にしたものだ。後に、「あの発言は、前もつて考へられてゐたのですか」と尋ねると、早紀江さんは「いいえ、主人が話せなくなつたので、咄嗟に口から出たのです」と答へられた。この時、私は、この横田ご夫妻は、天から与へられた使命に基づき、娘を救ふことによつて、祖国を救ふ力を持つてゐると思つたのだ。

天皇皇后両陛下も、この横田滋さんと早紀江さんの情景を見てをられたと思ふ。同年の御誕生日に皇后陛下は、拉致被害者に関して、次のやうなお言葉を発せられた。
《驚きと悲しみとともに、無念さを覚えます。何故、私たち皆が、自分たちの共同社会の出来事として、この人々の不在をもつと強く意識し続けることができなかったのかとの思ひを消すことができません。》

中共の尖閣諸島領海への度重なる侵犯及び香港への圧政を見て見ぬ振りをしてゐる安倍政権糾弾

本紙目次
一頁：
横田滋さんの闘ひを引き継ぎ、日本国家の再興を
二頁：
新風ニュース他

拉致を無視した
日本政府の作為
思へば、遅くとも福田赴美
(裏面へ続く)

新風

新風

新風